

へ見立てゝの詩学 古典文化の受容と変容の美学

―主に瀟湘八景を例に―

青木孝夫

はじめに 観光都市 広島

広島市、人口約一百万。サッカーチームも野球チームも交響楽団もある地方都市である。マツダという自動車企業の城下町である。この広島を訪れる観光客が必ず訪ねる場所がある。

一つは平和記念公園であり、その敷地内には原爆ドーム及び平和記念資料館がある。もう一つは、原爆ドームと同じく世界文化遺産として登録されている宮島である。(厳島神社があるため、宮島と呼ばれている。)一方、広島の代表的な美術館は、最優先の訪問場所ではない。

現代は、天才ないし才能や個性に溢れる芸術家の創造した所産、つまり藝術作品が、一般の人々の関心を惹かなくなった時代である。とりわけ個人の独創性を誇示する現代的な藝術作品への関心の衰退が目立つ。その一方で人類が地域で育んできた

世界遺産への関心が高まっている。また人々の興味も、藝術として了解されてきた古典的な文化の領域を超えて、広く日常的な文化の領域へと拡大している。アニメやテレビのドラマや映画やポピュラー音楽や広告やファッションを考えてみればよい。住居ですら、個人の趣味が関与するようになって久しい。

ドイツのヴェルシュエーが指摘する通り、我々の生活は現在、衛生的また機能的であり、デザインや色彩の点でも便利や実用を越えて美的である。しかも我々の生活は、芸術家のオリジナルな作品によって満たされている、というよりは、オリジナルのコピー、或いは複製でもない美的表象で溢れている。シュミラークルと言ってもよいかもしれない。

この文明の方向は、個人の力を越えた傾向である。私は、本稿で、個人の力を越えた文化的な記憶―とりわけ瀟湘八景―が

東アジアの文化圏で表象として広まり、現代文明の動向の中で共有されている事実を考察しよう。

第1章 広島土産―「紅葉饅頭」

第二次世界大戦の終了時、原子爆弾によって破壊された広島は、戦争や被爆の体験を踏まえ、平和運動が盛んである。被爆の記録や記憶などを伝達・保持・研究するミュージアムがある。原爆ドームは世界中から観光客の訪れる重要な観光資源でもある。今は、そうした政治や戦争絡みの共同体や個人の記憶ではなく、旅の思い出の話をしたい。旅を通して身体に刻んだ思い出も、いずれ時の経過と共に忘却されよう。旅を記録するには日誌もあり、今日では写真も必須である。しかし、ここで私は、旅からの帰途、職場の同僚に配布したりするために購入する土産の菓子から語り始めよう。

1-1 羊羹の美

旅先の土産物屋でよくみかける菓子といえば、饅頭と羊羹だろう。³まずは「羊羹」を取り上げよう。羊羹の美しさに注目した人に夏目漱石（『草枕』）がおり、また谷崎潤一郎『陰翳礼讃』がある。漱石は「余はすべての菓子のうちでもっとも

羊羹が好だ。別段食いたくはないが、あの肌合が滑らかに、緻密に、しかも半透明に光線を受ける具合は、どう見ても一個の美術品だ。」と〈食〉を越えて「羊羹」を「一個の美術品」と見做している。谷崎もまた羊羹の「肌」「色あいの深さ、複雑さ」を賞賛し「瞑想的」とするのであるが、和菓子に求められている美しさは、この種の視覚的な肌触りの次元に限られるのであろうか。

ここで和菓子の菓銘に触れよう。菓銘というのは、「羊羹」という名ではない。名称については言えば、「栗」羊羹や「柿」羊羹のように材料に由来するものではなく、「新秋山」の如く別に風雅な名前をもつ場合がある。それを「菓銘」⁴という。羊羹の味わいは、その美味や味覚を越えた青磁の如き「肌合」や「色合い」にのみあるのではなく、むしろ風雅の滋味にある。谷崎とは別の角度から和菓子の開示する世界について考えてみよう。

1-2 菓銘一和菓子の名前

菓銘については、先日亡くなった加藤周一が日本に特有のものとして述べている。日本文化を誇示する意図は全くないが、確かに日本は「和菓子にも立派な名前が付いている国です。」「夜

梅」とか、「春の月」とか、羊かんならば、味はどうせ似たようなものでしょうが。これほど菓子の名前が文学的な国は、私の知るかぎり、他にありません。」との指摘は本当ではないだろうか。

旅先で、お土産に菓子を購入する話に戻ろう。ここに写真を示しているのは、広島八ヶ所の名所に因む「広島八景」という菓子で、茶事にも用いられる。写真2は、菓子の説明のため、八ヶ所の写真を収めたものである。しかし、広島土産として日本中に知られている菓子は「紅葉饅頭」である。

1-3 土産に関する小考

〈土産〉と書いて日本語では「みやげ」と読む。英語では *souvenir*、*present*、*gift* などと訳されよう。旅先の地でとれる産物を、帰郷に際し持ち帰り、郷里の人々に配る贈り物である。土産は、このようにして旅先から郷里へ人が帰還する際に、二つの世界の架け橋となる。土産は、旅をした者から、郷里の人への贈り物である。ただの贈り物ではなく、旅に関する物語が付随する。土産は、プレゼント (*present*) であるが、旅の思い出の物語 (土産話) と共に提供されることがある。旅の思い出を分かち合う場合、お土産—紅葉饅頭—は、むしろ・

プレゼント (*re-present*)、つまり旅をした者の体験や記憶の代理的¹¹再現的な表象である。紅葉は、鹿と共に宮島への旅の焦点的な記憶の一つだからである。

1-4 「紅葉饅頭」考

菓銘の由来を記そう。一九〇五年の秋、もみじ谷という紅葉の名所のある宮島に遊んだ伊藤博文は、とある茶店で休憩した。(一九〇五年、伊藤博文、韓国の人にとっては忘れ難い記憶の始まりである。) 一人の乙女が伊藤にお茶を給仕したところ、その手を見て「もみじのような手だ」と褒めた。爾来、もみじの葉をかたどって饅頭を焼き始めたのが「もみじ饅頭」の由来とか。言うまでもなく饅頭は菓子の名である。菓子は、今日では、常食での栄養摂取が十分に足りた上での嗜好品であり、栄養という食事の直接的目的から解放された食品であり、その意味では逆説的な食べ物である。⁷

「紅葉饅頭」は菓子名と菓銘の合わさった名称である。名称の一部をなす「紅葉」は秋の季節の景物である。もみじの葉を象るその形状によって、紅葉饅頭は、見る者に黄葉する樹林、ひいては秋の季節を象徴的に示す。中国の「月餅」も似ていよう。中に各種の餡の詰まった菓子であるが、円形の形状が見る者に満月を喚起するが故に中秋の名月⁸に準えられ、中秋節に

は贈り物に用いられる。家族の団結と繁栄を祈願する意を含む菓子である。

菓子の数多の属性の中から主に形状を以て、紅葉や月との見た目の類似を梃子に、菓子里に「紅葉」や「月」という風雅な名前（菓銘）を付けることを（見立て）と呼んでいる。（この意味での見立ては、視覚的な隠喩である。）

この時、紅葉饅頭や月餅は菓子という現実の文脈と、紅葉（楓）や月が示す風雅の文脈との二重の文脈に属している。二重の文脈に属しているのは、見られる対象だけではない。見つめる我々もまた一方で現実の人であり、また他方で風雅の世界、美的世界に遊ぶ住人であるから、二重の文脈に属しているのである。紅葉饅頭という名称は、菓銘としては変種で、実際は、世俗的現実と風雅世界の両方の役割が饅頭そして紅葉という名前で重なり合っている。

第2章 〈見立て〉について

2-1 〈見立て〉の美的変身

皿を舞台に菓子が紅葉や月を演じているのと相即的に、見る側の美的演技ないし変身の次元が重要である。この美的変身は、美的な作法として理解されるべきだろう。余所の家を訪問

し、眼の前に「唐衣」（唐衣きつなれにしましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ）や「最中」が供されたならば、眼前の菓子が、現実と風雅の二つの世界に属すること、そのことを弁え知って、口にする前にしばし、風雅の世界に遊ぶことのできる美的教養が大切である。菓子を燕子花や満月として見る際、菓子が燕子花や満月に視覚的に比喻られていることを承知して、見る方がまた比喩的認識を超えて風雅の境地に遊ぶ作法と教養が大切である。前景である菓子を味わい楽しむに留まらず、菓銘の示す後景の世界に心を飛ばしてく塵外の境地に浸ることこそ、見立てでは肝要である。紅葉饅頭を食べながら、広島での旅の出来事を回想しつつ、古歌の「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声きくときぞ秋はかなしき」（猿丸大夫）境地にしばし浸ることも乙であろう。この精神は、何も菓子里に限られる訳ではない。⁹

2-2 〈見立て〉の種別について

卑俗な現実のなかに風雅の要素を見出し、それを味わう（見立て）という伝統がある。風雅の種を美的な作品（製品）に制作する（仕立て）の伝統がある。後者は具体的には紅葉という風雅の種と世俗的な饅頭とを結びつける構想に拠って、これを

実際の紅葉饅頭に〈仕立て〉る創作である。単純化を恐れつつ繰り返そう。小麦粉と油と砂糖蜜などからできた生地で餡を包んでいる円形の菓子。この菓子を満月として敢えて美的な認識を行うことが〈見立て〉である。饅頭をもみじの葉の形にしたら面白いだろうというので、この発想に従い、もみじ型の饅頭を造ることが〈仕立て〉である。簡単に前者を〈認識の見立て〉、後者を〈造形の見立て〉ないし〈仕立て〉といおう。

日本では中国の文化を受容するのにも、この見立ての認識と造形を適用した。その場合、漢つまり中国が雅、和つまり日本が俗。次に和漢雅俗の重合する表現を検討する。その前に、簡単に見立ての種別について図表Ⅰに整理したので、参考にされたい。

図表Ⅰ

	見立ての対象	見立ての仲立ち	見立ての性格	実例
比喩的認識 ¹⁰⁾ の〈見立て〉	疎遠・未知・抽象	身近・熟知・ 具体的事物や出来事	疎遠を常識的にする たとえの遠近法	理論的認識 例「電池」 「電流」 「電圧」 電気を水で 理解
想像の ¹¹⁾ 〈見立て〉	俗世・此方 具体的	彼方・聖・雅・彼岸 古典・異郷・彼岸	身近に遙かな事を認め 心で架橋する逆遠近法	近江八景
〈仕立て〉の 〈見立て〉	古典・異郷・彼岸 彼方・聖・雅・風流	身近で熟知の生活 身近・当世・俗世	高尚・本格に卑近・俗 を綯い交ぜて表現する	座敷八景・ 逢身八契 八景菓子

2-13 風景のく見立て>>とプロトタイプ¹²

瀟湘八景¹³に倣った近江八景の如き風景の見立ては（見立て）の代表的文化現象の一つである。他にも例えば岩木山を津軽富士と言ひ、大山を伯耆富士と言ひ、地元の山を富士山に見立てる例がある。土地を代表する山岳に日本を代表する富士山を重ねて見るのである。この時（富士）は固有名詞ではなくプロトタイプ¹⁴である。説明しよう。固有名詞の富士山は、山梨と静岡の両県に跨がり聳えるコニーデ型の休火山にして日本一の高さ（三七七六m）と秀麗な山容を誇る我が国を代表する独立峰にして云々、と無数の文化的・社会的・自然的属性の担い手である。これに対しプロトタイプは、無数の属性を担うのではなく、地域を代表する高い山、独り聳え立つ姿の秀麗さ等、富士山と言えば想起される社会的に共有の知識や特性からなる個性的な表象つまり富士山（らしさ）である。全国至る所に存在する〇〇富士は、地方の山岳が富士山の型に（見立て）られた結果なのである。プロトタイプの流布には富嶽を描いた絵画を甫め様々の文化所産が貢献していよう。そのお陰もあって、プロトタイプは自然的環境を離脱し、常識の世界に自生し、社会的身体という共同体に根づいている。社会の一員として教養を身に着けるとプロトタイプは認識の枠・発想の型として働

く。例えば、絵画や詩歌に描かれ歌われた富士山のイメージを投影して地元の名山を観る所、眼前の山岳は、心に触発された芸術世界で富士山像を演技・模倣するわけである。

富士山と同じことが、瀟湘八景の場合にも言える。瀟湘八景は中国の実在の風景から離脱し、日本人の教養の中に融け込み、周知のプロトタイプとなったのである。¹⁵

2-14 近江八景の想像的見立てについて

琵琶湖畔に立ち、眼前に広がる風景に、詩や画で知る瀟湘八景を重ねて見る時、八景の根ざすコンテクストは、中国から日本へと移し替えられている。八景のプロトタイプが新しく近江の風光に受肉する事態は、他方で眼前の光景の文化的典範への「なぞらへ」である。『風俗文選』中に千那は「近江八景序」と題した一文を編み「近江八景は、湖水の絶景をあつむ。比良堅田より、三井石山につらなり、粟津辛崎を見渡し、勢田矢橋を合せ、瀟湘の八景になぞらへ、八の所を定む。（以下略）」¹⁶と述べる。

これは格の高い異文化の名所の型に自国の風景をなぞらえて受容するユニークな文化翻訳の姿勢である。¹⁷ 自然的地形の上に文化的な地図を転写し重ね合わせ、新しく「八の所を定」む

という形で景観と共に、その見方も創出したのである。かくして彼方の景観が此方に転写され、我が国の各地に〇〇八景が多数出現¹⁾する。それは藝術の力を借りた景観の創作でもあるが、景観を見る視線の創出なのである。

オスカー・ワイルドは、アリストテレスの〈藝術は自然を模倣する〉を逆転し、〈自然が藝術を模倣する〉と述べたが、この逆説は、我々が検討している瀟湘八景についても当てはまる。彼は『虚言の衰退』の一節で「唯、私が指摘したいことは、アートが生活を模倣するよりも遙かに広汎に生活がアートを模倣するという一般的な原則です。自然は我々を生んだ偉大な母ではありません。自然は我々の生み出したものなのです。(中略)現在、人々は霧をみる。霧が出てくるからではなく、詩人や画家が尽力して霧の不思議な魅力を人々に教えたからだ。ロンドンには、過去、何世紀もの間、たしかに霧があった。あるにはあった、と敢えて言います。しかし、見る人はいなかった。そういう訳で、霧の何たるかについて人々は何にも知らなかった。藝術が霧を発見するまで霧が存在していなかったのだから。」¹⁾

近世的(見立て)の表現行為、つまり(仕立て)としての見立ての特徴を検討してみよう。

第3章 「近江八景」の(仕立て)

近江八景²⁾は、「瀟湘八景」を模して琵琶湖の南域に定められた名所である。明応九年(一五〇〇年)、公卿の近衛政家が、近江の湖水地方の美しさを讃えるのに、瀟湘八景に因み、八首の和歌を詠んだことに拠ると言われているが、実際の成立はもつと下り、従って実際は、別人の詠になるだろう。下記に八景と共に和歌を提出する。近江八景の八ヶ所の名称を見ると、中国の瀟湘の風景に重ねられていることがわかるだろう。

八景を読み込んだ近衛政家の和歌

石山秋月

石山や鳩の海てる月かけは明石も須磨もほかならぬ哉

瀬田(勢多)夕照

霽時雨もる山遠く過ぎきつ夕日のわたる勢多の長橋

粟津晴嵐

雲はらふ嵐につれて白船も千船も浪の粟津に寄する

矢(八)橋帰帆

真帆ひきて八橋に帰る船は今 打出の浜をあとの追風

三井晚鐘

思うその曉ちぎるははじめとぞまづきく三井の入あひの声

唐崎夜雨

夜の雨に音をゆづりて夕風をよそにそたてる唐崎の松

堅田落雁

峯あまた越えて越路にまづ近き堅田になびき落つる雁がね

3-1 安藤広重作「近江八景」(一八三四年)

安藤広重の「近江八景」図は、伝近衛政家詠の和歌を画中上部の雲に書き込んだもので、江戸後期の名所絵のスタイルを示すものである。掲出のものは縦版であるが、彼は横版の近江八景はじめ、幾種かの八景名所絵を制作している。中世から近世にかけての日本では、山水画の瀟湘八景や博多八景の漢詩などを創作していたが、水墨画から浮世絵、漢詩から和歌への展開が示すように、近世に入ると中国文化を日本的な形へと変容する形で受容する一種独特の翻訳文化が盛行した。それは中国の拡大であり、中国の日本化でもある。最初は、瀟湘八景を描く詩歌や絵画を直輸入して鑑賞していたが、やがて図の模倣や同構想の漢詩の創作を経て、自分の関心に合わせて八景観を解体・変容させて再製していく。

この日本化の過程はまたプロトタイプ化の進行でもある。それは瀟湘八景が、日本人の心に根ざして、物を認識する際に認識の枠組みとして機能し始めることに他ならない。この場合、日本人の心とは一人一人の心でもあるが、日本という歴史的な社会の集合的心である。共同体が共同の体を持つなら、共同

の心を持つても不思議ではない。共同の心、英語ならcommon sense即ち常識といつてよい。

風景としての「瀟湘八景」は、このようにして実在の対象から、認識の基準、認識の枠組み、発想の型へと変容を遂げていく。実景からプロトタイプが生じる媒介となるのは、(今日の名称では)多くの藝術作品である。これらの藝術作品の次元で、絵画や漢詩の受容や模倣という具体的な文化現象を、例えば所謂美術史の枠組みで研究するのではなく、私は文化の継承や生産の論理で考えてみたい。

3-2 プロトタイプとしての〈瀟湘八景〉について

〈見立て〉は、焦点的事象の根差すコンテキストを転移する文化の翻訳現象である。焦点が、落雁の場合には「平沙落雁」から「堅田落雁」へ、八景の場合には「瀟湘八景」から「近江八景」へ。八景はそれぞれ、漢字四字で構成され、これは二字ずつの組み合わせである。二段階のレベルでの場所と標題の組み合わせである。雁は洞庭湖に舞い降りて「平沙落雁」。琵琶湖に下りて「堅田落雁」。楽器の琴の上に下りれば、「琴柱(「琴路」落雁)」。落雁という題の場面が平沙から堅田に転位するように、八景という題と場面の八個の組み合わせは、中国の

湖南から日本の近江という場所へと転位する。この八景という

コンセプトは、題と場面と場所の三位相から成立している。そ

の内、最も具象性の高い題の契機、例えば「落雁」や「帰帆」

や「秋月」が、美的な表象を形成していく際の核となるのであ

る。しかし、見立ての創作で肝腎なのは、この焦点的な題をい

かなる場面や場所に設定するかの問題である。このく八景と

いう詩学（＝創作学）的カテゴリーは、江戸時代には、これを

現実に適用することによって眼前の事象に輝きを与えるより

は、現実の世界を一つのフィルターを介して理解し形成する際

の美的な道具になっていた、と言えよう。

世に八景といふことの、ここにもかしこにも多かるは、も

ともろこしの国の、なにがしの八景といふをならひてさだめた

る、近江八景ぞはじめなめるを、又それにならひてなりけり。

さるはむげに見どころもなきところをさへに、しひて入れなど

したるがおほかるは、いかにぞや。まことにその景を賞となら

ば、けしきよきかぎりをとりてこそ、さだむべけれ。そのかず

にはさらにかかはるまじく、いくつにても有べきに、数をかた

く守りて、かならず八ツにととのへむとしてこそ、ちぢなく

おぼゆれ。（本居宣長『玉勝間』十二の巻「八景といふ事」

21

宣長のいうように、美しい風景でも、いつも八箇所見所を設

定するのは不自然で、その作為が面白くないということは、そ

の通りであろう。しかし、このことは、八景という観念の図式

が規範化して、一つの風景のモデルとして尊重され、このモデ

ルに従って、瀟湘八景にそっくりではなく、いわばその形式を

借りて風景を認識し、あるいは景観を創出しようとする、当時

の盛んな風潮を偲ばせよう。瀟湘八景は、見て美しい風景では

なく、風景を美的に見るための詩学的なカテゴリー即ちプロト

タイプへと変じているのである。このく瀟湘八景が実景を越

えた現実世界に投射されてフィルターで掬い取られる独自のイ

メージが表現の面白みとなる。従って、表現の領域も、景観や

所謂藝術の領域を越えて拡大した。八人の美人つまり美人八景

とか着物の意匠や菓子の意匠へと展開していくのである。詳し

い分析は後日を期し、若干の実例を挙げておく。

第二章 八景の庶民文化への転位一見立て替え一

4-1 喜多川歌麿作 「逢身八契、三勝半七の母節」²²

（一七九八・九九年）

「近江」と「逢身」で発音Onnaがほぼ同じということで、八景は地名から恋愛へと転位している。

八つの情景は風景という自然から人事に転じ、江戸の庶民にとって著名な恋愛の場面が八個選ばれている。「八景」ならざる「八契」Hakkeは八組の男女の契りの意味である。「暮雪」Bosetsuは同音異義語に転位し「母節」という人妻の色恋の一つの姿を示す。

このように今回の文脈転位は、発音の領域で類似性の原理を自在に活用し同音異義語に転位している。場は風景から人事に移り、八組の男女関係の場面が設定される。このように瀟湘八景に発する文化的な記憶は、その内実が捨象され、単に事象認識や文化創作の発想の型として八景のコンセプトが了解されていることがよく分かる。もとより、左上のコマ絵をみると、近江八景の一場面「比良暮雪」が描かれ、この八契図と元の瀟湘八景図との関係が意図的に明示されているが、もはや両者の関係は「似ている」のではなく、「関わりがある」である。

4-2 鈴木春信作「座敷八景」・「風流座敷八景」

(一七六九年)

春信の「座敷八景」は見立絵の代表的な事例である。一点だ

け述べよう。八景という場面が、元の文脈を離脱し、他の場面へと越境・転位する仕方が特徴的である。瀟湘八景から近江八景への転換は風景という「同類」の中での転位であり、「類似」ないし「類比」に依拠する。しかし、この座敷八景は、落雁・帰帆などの見所の場面を屋外の風景から新たに室内の座敷道具に移し変え、主題が属する文脈を瀟湘の地から座敷道具へと奇抜に転位させて、独自の表現を試みている。この発想は、連句に言う〈見立て替え〉である。落雁や帰帆に気付くことが、絵画解読の眼目である。彼は更に、この「座敷八景」を「風流座敷八景」という春画へ展開させている。その味わいは春情をそそるものではなく、むしろ春情から美的な距離を取る絵画解読という極めて知的なものである。²³

4-3 菓子八景

八景を風景から室内の道具に変換することは、なるほど奇抜であるが、しかし、同じ空間内での転位ではある。近江の菓舗である茶丈藤村の「石山秋月」は、この菓銘に現れたコンセプトを菓子という質料を場として受肉させている。「秋月」という見所の転位する場所が、「どら焼」という菓子なのである。

「月見どら焼」などと銘打たないところが粹である。こうした

八景菓子は探せば、日本各地に見出すことができよう。浅草の満願堂の「隅田八景」は、「大川暮雪・今戸帰帆・向島秋月・蔵前夕照・浅草寺晚鐘・吉原土手落雁・待乳山青嵐・柳橋夜雨」からなるが、菓子を包装する箱にその意匠がこらされているものの中身は皆同じ芋羊羹である。東京土産に結構売れているとのことである。

結び 故郷としての瀟湘八景

このように美しい瀟湘の湖水風景への関心は、まず中国で現実の景観（自然）を模倣する事で「瀟湘八景図」や詩歌という藝術を生み出しただけではない。瀟湘八景の絵画や詩歌が日本や朝鮮に輸入されて、東アジア共通の教養となった。日本では更に展開して、八景的な現実の景観を生み出す表象の装置に変貌している。安藤広重の浮世絵で「近江八景」は日本中に知れ渡った。春信の「座敷八景」「風流座敷八景」。喜多川歌麿の「逢身八景」。彼らの浮世絵は、風景という八景的な景観を描いていない。瀟湘八景という美的な文化資源を換骨奪胎的に利用し、新たな絵画世界を〇〇八景という美的表象として構築・構成しているのである。八景は、景観から絵画、またそれを越えて日常の生活の領域に拡大している。表現の場の転位に関し

て機能しているのはく見立ての詩学である。和菓子では、八景の発想で組菓子を揃いに仕立てることが狙いであり、その分、もとの瀟湘八景との繋がりは希薄化していよう。しかし、菓銘に瀟湘八景の名残を留める和菓子を口に入れば、我々は商品という美的表象との戯れを介して、眼と舌を通し、心で東アジアの思い出に触れている。訪れたこともないのに、いつのまにか瀟湘の地は、我々の心の故郷になっている。

注

1 W・ヴェルシュ、小林信之訳『感性の思考 美的リアリティの変容』、勁草書房、一九九八年

2 記憶の問題は、昨今の研究動向であるが、ここでは以下の二著に言及しておく。都留文科大比較文化学科『記憶の比較文化論 戦争・紛争と国民・ジェンダー・エスニシティ』柏書房、二〇〇三年 木下直之『世の途中から隠されていること―近代日本の記憶』晶文社、二〇〇二年

3 中山圭子『和菓子 夢のかたち』（東京書籍、一九九七年）十一頁。

4 例えば「月形の山芋を羊羹生地の真ん中に置いた「新秋山」」（前出 中山著、十三頁）など。現代では、山芋の代わりに生地の色違いの羊羹を入れるそうである。これらがある程度一般的な名前だとすると、それぞれの菓子店舗や地域でつけられる名前もある。いずれも、多くは自然の美的な風景に見立てられて名称がつけられている。これを、繰り返しになるが「菓銘」というのである。現在、主流の煉羊羹が始まったのは十八

世紀末の頃というが、すでに元禄時代頃から、羊羹にはいろいろな名前のついたものがあつたようである。『男重宝記』

（一六九三年）には、こうした羊羹のデザインと名前が記録されている（中山、十三頁）。佐々木健一『タイトルの魔力』

（中公新書、二〇〇一年）参照。

5 加藤周一『日本文化のかくれた形』（岩波書店、一九八四年）三九頁。

6 「広島八景」は広島の名所、広島らしい名所を八ヶ所選んで、菓子に仕立てたものである。菓子舗株式会社山田屋の製造であるが、「元来は、須美多屋という老舗の菓子舗にて、昭和三五年頃から、製造されている商品。平成十二年四月に、このお店が廃業されるといふことで、職人さんと一緒に、やまだ屋へ来て、いただき多少の原材料を変更して、平成十二年十月

より商品化」とのこと。以上、山田屋より筆者への返答。もとより、この「広島八景」の発想は、長沢盧雪「宮島八景」（一七九四）の影響下にあるう。なお「宮島八景」と所謂「敵島八景」との関係については調査中。

7 この饅頭、中国から渡来した。一説に一二四一年（仁治二年）、博多の承天寺の開祖、円爾弁円が宋より帰朝し伝えたものという。西暦では同じ1241年だが、年号では一年早い仁治元年、道元著『正法眼蔵』の「看経」の条には、「齋前に点心をおこなふ。（中略）あるいは饅頭六七箇。羹一分、毎僧に行ずるなり」との記述がある。このように、寺院での「齋」前に食べる点心の饅頭には、栄養摂取が期待されていた。（以上、渡来時期については、中山圭子『和菓子の世界』（岩波書店、二〇〇六年、一三〇頁。）参照。）

8 最中（水の面に照る月波をかぞふれば今宵ぞ秋の最中なりける（源順）『拾遺和歌集』（秋））。月見団子など、日本にも月絡みの菓子は多い。また月見蕎麦。

9 松尾芭蕉の（見立て）に触れよう。眼前の表現に新しい脈絡で振る舞う役を与えるのは、また連歌俳諧の精神でもあるが、この俳諧は近世的（見立て）の源である。松尾芭蕉の『奥の細道』に、「岩手の里に泊る」一節がある。岩手の地域の一部

は、かつて南部と呼ばれ馬と人が一体となつて暮らす農家建築、南部曲屋が著名である。芭蕉がそんな農家に宿泊した折の一句を掲出しよう。

蚤虱馬の尿する枕もと

夏目漱石は、この芭蕉の発句に対し「芭蕉と云う男は枕元へ馬が尿するのをさえ雅な事と見立てて発句にした。（『草枕』）」と述べている。ここには馬の尿をリアルに観察する姿勢とそれを風雅に転じて遊ぶ風流の姿勢の併存が窺える。芭蕉は風雅を求めて旅に出た。今宵は、馬を大事にして人と一緒に住むような田舎で、蚤や虱のいる宿に泊まる。眠りのために横たわると、壁一枚隔てた厩からは馬特有の長い小便の音が聞こえてくる。だが人馬が共に眠る素朴な生活の中では、湯気をたてて流れる馬の小便は、汚物どころか、何かしら滑稽な中に生活への、生へのいとおしみを感じさせる。風雅は、単に綺麗なものの愛好を指すのではない。この世に生きることの意味を、世俗とは別の次元で味わわせてくれる文化なのである。

10 比喩的認識の（見立て）

縁遠い事例や理論などを、身近な具体例を通して理解する（見立て）の類。電気の理論に関連する事項を水という身近な物質の種々の性質を通して理解する。その鍵となる言葉を掲出

すれば「電圧」「電池」「電流」等々である。何が身近かは、場合による。王府井を北京の銀座に見立てるのは日本人であり、逆に、銀座を東京の王府井に見立てるのは中国人ということになる。甲を乙として見立てる場合に、身近なプロトタイプ（乙）で、馴染みのうすい事物（甲）を理解・把握することが眼目である。このく見立てを比喩的理解の見立てと呼ぶ。このメカニズムは、言語を例にすれば、隠喩的な認識である。

11 想像の（見立て）

日本では、例えば和菓子の菓銘に用いられる美的イメージや名称や典拠となる和歌の蓄蔵された文化的資源の源泉には、自国の古典的な文化、即ち『源氏物語』や『伊勢物語』などの物語世界もあれば、また和歌の世界もある。いずれも宮廷の美的文化を代表するものである。中国の古典的文化も憧憬の対象であった。瀟湘八景がその一つである。近江八景を瀟湘八景として受容するのが典型的事例であるように、文化的に格上と見做される存在（瀟湘八景）に、眼前の対象（琵琶湖の風景）を準えるのが、想像の見立てである。遙遠なイメージないし観念の枠組を眼前の現実を受肉させるものである。この場合には、身近な事物は、遙遠な世界の価値の放射を受けて、輝くことになる。

12この節は、拙稿「(見立て)の美学」(雑誌『日本の美学』二四号、一九九六年所収)の旧論考を利用している。

13瀟湘は、現在の中国湖南省の洞庭湖からその南、湘江と瀟水の交わるあたりを言う。早くから、その湖水近辺の景観が賞せられた。そうして十一世紀の中葉、北宋の文人画家 宋迪が八幅の画に描いて定めたのが瀟湘八景である。これは画題でもあるが、また八景からなる瀟湘の実景でもある。山市晴嵐・漁村夕照・遠浦帰帆・瀟湘夜雨・煙寺晚鐘・洞庭秋月・平沙落雁・江天暮雪。(沈括『夢溪筆談』・恵洪『石門文字禪』)。

14プロトタイプについては、Gレイコフ『認知意味論』(池上嘉彦他訳・紀伊国屋書店)参照のこと。

15海外の文物を受容する際には、絵画や文藝が仲立ちとなることが多い。種々の「近江八景」や春信の「坐鋪八景」は瀟湘八景の受容史の一環に位置づけられようが、日本に於ける瀟湘八景の複雑でかつ長きに渡る受容史ないし変容史自体を述べる暇はない。本論の考察は、それを重要な課題とはしているが。絵

画関係では、太田孝彦「室町時代における中国絵画の受容」(『日本の美術』昭和堂1989年 所収)、また同氏「室町時代における瀟湘八景図」(『芸術論究』第3号) 武田恒夫『絵画と歳時』(べりかん社) 小林忠『春信』(東洋美術選書)

呉永三 「韓国と日本の八景障屏画における景の順序の成立とその背景」雑誌『美学』二〇〇八年第二号、五七〜六九頁等を参照。呉永三氏に拠れば、瀟湘八景図は、「北宋の宋迪、南宋の王洪と馬遠、元の張遠、明の王紱・陳叔起の瀟湘八景図に至るまで、すべてが横巻」だが、日本では掛軸でまた画巻、画冊に展開し、全体の画面構成を喪失した、という。詩歌の方面の比較的最近の研究としては、堀川氏の優れた論考がある。「瀟湘八景詩について」(雑誌『中世文学』第三四号。中世文学会) また堀川貴司著『瀟湘八景：詩歌と絵画に見る日本化の様相』(臨川書店、二〇〇二年)。

16日本古典文学大系『近世俳句俳文集』岩波

17芳賀徹「風景の比較文化史」(『比較文学研究』五十号、一九八六年、所収) 参照。

18この点については例えば雑誌『日本の美学』3『所収の樋口忠彦「風景と型」、また中村良夫『風景学入門』(中央公論新書)を参照。

19拙訳。The Decay of Lying

20瀟湘八景図については、既に室町禅僧文化圏での分厚い受容の歴史と研究がある。牧谿の「瀟湘八景」図をはじめ、その長きに及ぶ瀟湘八景の詩歌・絵画に於ける受容の歴史については

割愛するが、背景には言うまでもなく中国文化への憧憬がある。

中世末から近世にかけて、個々の具体的な作品を越えて瀟湘八景という文化的な図式が成立し、瀟湘八景は図や詩を超出して、日本人の美的文化世界に於いて、新しい形で展開した。旅行や印刷や商業が盛んとなり、日本各地に瀟湘八景をモデルとする八景を設定し、これを漢詩に詠み、或いは水墨画に描くことから、和歌に詠み、或いは浮世絵に描くことが流行し、名所絵が盛行した。最も著名な例が近江八景である。

21 ここには薄れたとは言え、「もろこし」つまり中国が強く意識されている。瀟湘八景は、中国に発し、日本と朝鮮で共通の教養となっていた。この事実を宣長は強く意識していたのである。

22 この作品を知ったのは、国文学研究資料館編『図説「見立て」と「やつし」 日本文化の表現技法』（八木書店、二〇〇八年）に拠る。豊富な資料を紹介している。

23 春画の解説については、下記を参照。早川聞多『春信の春 江戸の春』（文藝春秋、二〇〇二年）、早川他編『浮世絵春画を読む（上）』（中央公論叢書、二〇〇〇年）等を参照のこと。

図

図1「もみじ饅頭」の図版は、宮島の「藤い屋」の商品案内から、インターネット上の写真を借用している。また図10「石山の秋月」は、大津市の「茶丈藤村」の商品案内から、同じくインターネット上の写真を借用している。

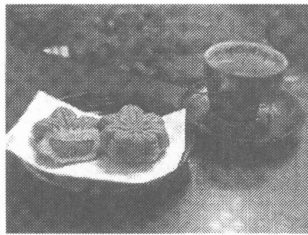


図1 もみじ饅頭



図2 廣島八景

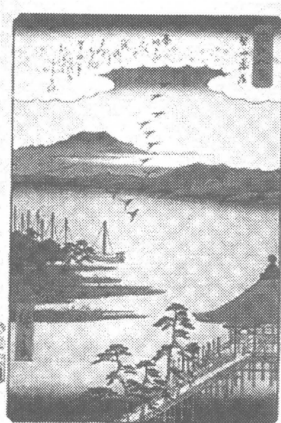


図4 安藤広重 「近江八景・壑田落雁」

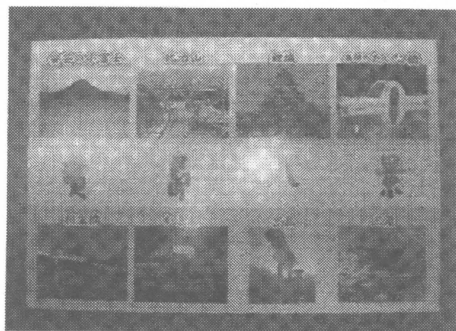


図3 広島八景

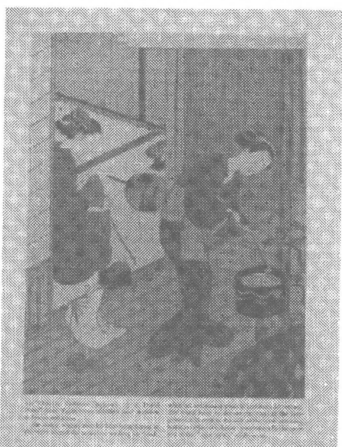


図6 鈴木春信 「座敷八景・手拭い掛けの帰帆」



図5 安藤広重 「矢（八）橋帰帆」



図8 喜多川歌麿 「逢身八契・三勝半七母節」



図7 鈴木春信 「琴路の落雁」



図9 安藤広重 「近江八景・石山秋月」



図10 「石山秋月」 (菓子)

図11 鈴木春信 「風流座敷八景・琴柱落雁」

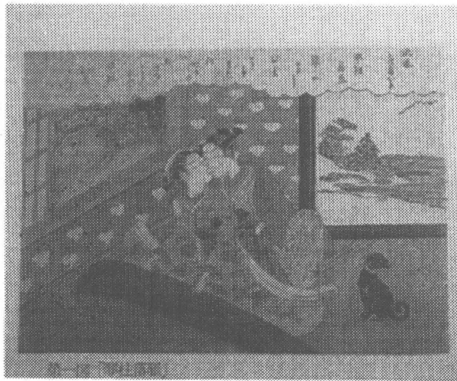


図12 隅田八景

